

編集後記

今月の特集は老人のリハビリテーションである。今回は障害老人にとっては医学的リハビリテーションと並んで極めて重要な社会的リハビリテーションに的を絞った特集となった。

在宅リハ・サービスと機能訓練教室と題して伊藤氏は、先進的な横浜市における現状を紹介されたが、このようなシステムを医療機関や福祉施設の代替として位置づけるのではなく、施設整備とは別に開発していくべきことを強調している。この点は重要であり、編集者も全く同感である。障害老人の在宅ケアにおける極めて重要なアプローチの一つに生活環境の整備があるが、石神氏は在宅障害老人の生活環境整備について、家屋改造の指導に際して注意すべき諸点を具体的に解説されているが、これらは入院患者の退院時の指導に際して良き参考になるであろう。在宅障害老人ケアシステムに関して小山氏は、行政面から種々の問題点を指摘されたが、とくに、現在の多種サービスの相互乗り入れ、供給側の情報の一元化等について強調され、更には保健所と福祉事務所との一元化という大変革の検討を提案されている。検討されなければならないことはまことに多いことを痛感させられた。在宅寝たきり老人の実態と訪問

看護と題して中島氏は、既に昭和50年から横浜市において行われている訪問看護事業における経験から表記の実態について述べられたが、これは障害老人の在宅ケアを考える上で重要な資料となるであろう。老人保健施設についてと題して小野氏は、まず現在わが国で行われている要介護老人対策の現状を述べたのち、中間施設の提言から老人保健施設の制度化にいたる経緯、老人保健施設の内容について極めて明快に解説された。

なお、特集論文のほかに、本号の講座(社会福祉施設)は今田氏の老人福祉施設であり、養護老人ホーム、特別養護老人ホーム、軽費老人ホーム等の解説と、病院、老人保健施設、特別養護老人ホームの比較等が詳しくなされており、特集を補完するものとなっている。

あと一つの講座(歩行)は、今月は藤田氏の病的歩行の観察システムについてであり、いよいよ佳境に入ってきた感が深い。

巻頭言で坂井氏はリハビリテーション医療の問題点を色々指摘されているが、「これはおかしい」と思われることは随分と多いものである。近い将来に何とか本来の在るべき姿にもっていききたいものである。

(横山 巖)

総合リハビリテーション (第15巻 第7号)
1987年7月10日発行 (毎月1回10日発行)

発行 株式会社 医学書院
代表者 椿 孝雄

1部定価 1,650円 (配送料60円)

(年ごめり予約購読料 21,560円)
(但し、増大号を含む)
(送料弊社負担)

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3
電話 受付台 (03) 817-5600
本誌編集室直通 (03) 817-5704
(担当: 山田・細田)
販売部直通 (03) 817-5659・5660
ファクシミリ (03) 815-7802
振替口座 東京 7-96693番

印刷所 三報社印刷(株): 電話 (03) 637-0005
広告申込所 (株)東広社: 電話 (03) 409-8803

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku Tokyo © 1987, Printed in Japan.
本誌の内容を無断で復写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
茨 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欲
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)